

経済同友会・同友クラブ共催 新春会員懇談会

2020年オリンピック・パラリンピック 東京大会の成功に向けて



講演：橋本 聖子 氏

経済同友会・同友クラブ共催による新春会員懇談会が開催された。2020年オリンピック・パラリンピック東京大会が近づく中、開会挨拶で櫻田謙悟代表幹事は、経済同友会が行ってきた東京大会の成功に向けたさまざまな取り組みを紹介。続いて、冬季・夏季を合わせて7度にわたってオリンピックに連続出場し、現在は東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会担当大臣を務める橋本聖子氏が講演を行い、大会成功に向けた思いを語った。

東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会担当大臣

1983年富士急行入社。1984年オリンピック・サラエボ大会出場、以降1996年アトランタ大会まで7大会連続出場。1992年アルベールビル五輪銅メダル。1995年参院選初当選。自由民主党女性局長、外務副大臣などを歴任。2019年9月東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会担当大臣、内閣府特命担当(男女共同参画)大臣、女性活躍担当大臣就任。

アスリート・ファーストの視点で、 万全の準備で安全・安心を確保する

2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に対して、経済同友会の皆さまには日ごろから大きなご支援をいただいております。あらためて心から感謝を申し上げたい。

東京大会の開催まで、残すところ、あとわずかとなった。開催都市である東京都と運営を行う大会組織委員会、そして予選などを受け入れている全国の地方自治体に対し、国は全力でサポートし、オールジャパンで連携、準備に当たっている。

その中で、大きな問題となっているのが感染症対策だ。現在、新型コロナウイルス感染症が世界的に広がっており、日本政府はそれを食い止めるべくさまざまな対策を取っている。私が選手団長を務めた2010年の冬季バンクーバー五輪では新型インフルエンザが、2016年の夏季リオ五輪では蚊が媒介するジカ熱が流行し、日本選手団もその対策に迫られた。こうした経験を通して痛感したのは、情報の正確な把握と共有である。そのため新たに感染症対策に関する政府の窓口を設けることにした。窓口からは、さまざまな情報を

各競技団体にプッシュ型で提供する。

何よりも重要なのは「アスリート・ファースト」の視点で、安全・安心を確保することだ。また、セキュリティ対策も重要になる。特に、最近は見えないサイバーテロが盛んに行われている。2012年のロンドン五輪では、公式HPに対して2億回の不正アクセスが、同様に2018年の平昌五輪では、大会準備期間に6億回のサイバー攻撃が行われたと言われている。こうした攻撃に対処するために政府では、昨年4月にサイバーセキュリティ対処調整センターを設置するなど、従来以上に対策を強化し準備を進めているところだ。

大会期間中の輸送対策についても、まさに政府が取り組むべき課題である。大都市東京での大会だけに相当な混雑が予想される中、どのような交通削減策が有効なのか試行して、対策を打ち出している。例えば、一般車両に対し



開会挨拶をする櫻田代表幹事

て首都高速の日中の料金を1,000円上乗せし、夜間の料金を5割引くことにした。また、企業の皆さまには、働き方改革の推進の意味も込めて、大会期間中のテレワークの推進を呼び掛けている。

成熟した国・日本、成熟した都市・東京での大会だけにハードルは高いが、それを乗り越えるべく努力しているとところだ。

聖火に感動、聖子と名付けた父 五輪担当大臣に運命を感じる

私は、1964年の東京五輪の開会式の5日前に北海道で生まれた。父は幸運にも祖母と共に東京で開会式を見ることができ、聖火に感動して、私に聖子という名前を付けた。その私がオリンピック選手となり、大臣としてオリンピックにかかわることに運命を感じている。

東京大会は戦後復興の日本の姿を見



会場からはさまざまな質問や意見が出された

懇談会

講演会の後、経済同友会と同友クラブの懇談会が開催された。井口武雄同友クラブ理事長が、「同友クラブは、経済・文化・外交などの専門家を講師に招いた勉強会や、文化的な同好会活動などを行っている。いわば右脳と左脳の両方を鍛える団体だ。若い皆さんにもぜひ参加していただきたい」と挨拶した。



せる大会であり、高度経済成長の起爆剤となる大会だった。それに対して今回は、日本が2020年を通過点として、心豊かで持続可能な社会をつくるためのトップランナーになるための大会ではないかと思う。地球温暖化、貧困、食糧、エネルギーなどの地球全体が抱える問題に対して、ハードとソフトを融合させ、どう解決すべきなのか、そのヒントを世界に向けて発信していくチャンスだと考える。

私はアスリートとして7度のオリンピックに出場したが、議員になってからもアトランタ大会に出場している。そのことによって、単にスポーツを「する」だけでなく、「見る」「支える」という立場からも理解することができた。そうした経験から、「する・見る・支え

る」という大きなつながりの中で、スポーツ産業を育成する必要があると考えている。東京大会は、そのための大きな力にもなるはずだ。

予防医学・予防医療の研究により健康寿命の延伸に役立つと期待

東京大会では健康も大きなテーマである。私は小学3年で腎炎になり、体力づくりのためにスケートに打ち込み日本のトップ選手となったものの、高校3年で腎臓病が再発して入院生活を送ることになった。さらにストレスによる呼吸障害を起こす中で、メンタルトレーニングによって怒りをコントロールするように努めた。その後は医療事故によりB型肝炎も患った。そうした経験から、予防医学・予防医療の重要

性を身に染みて感じている。

現在、トップアスリートのトレーニング施設である「ナショナルトレーニングセンター」に隣接する「国立スポーツ科学センター」では、アスリートのためのさまざまな先端的研究を実施、食を中心にした予防医学・予防医療の研究なども行っている。こうした研究と地域医療を組み合わせることで、健康寿命の延伸に役立つと期待している。そのためには、予防医学・予防医療の視点に立った診療報酬制度も考える必要があるだろう。

東京大会が終わりではない。その先のレガシーをどう築くのか。経済同友会の皆さまとも一体になって、それをしっかり見届けて次世代に受け継いでいきたいと考えている。

Q A 質疑応答

Q パラリンピック後は、国としてどんなサポートを行っていくのか。

A 文部科学省やスポーツ庁を中心に、大会後もパラアスリートに対するサポートに全力で取り組んでいく。共生社会を実現する上で、パラアスリートから学ぶことは多い。そこで教育の場にパラリンピアンを派遣し、パラリンピック教育を進めることを検討してはどうだろう。それは、パラアスリートのセカンドキャリアにもつながると思う。また脳科学をはじめパラアスリートに関する研究から、人間の本质に迫るさまざまな成果が生まれている。そうしたことも教育や医療の中で活かしていくべきだと考える。

Q ポスト2020が極めて大切だ。そのモメンタムを後押しするものが必要ではないか。

A 2020年以降を見据えた取り組みとして政府では、日本文化の魅力を発信する「beyond2020プログラム」を全国で推進している。また、東京大会の競技終了後、選手がホストタウンを訪問し、地元の方と交流を行う「ただいま・おかえりホストタウン」という事業も推進する。ラグビーW杯がそうだったように、東京から全国に向いていただけるような、おもてなしのキャンペーンにしっかりと取り組んでいく。さらに、モメンタムの後押しという点では、ハードとソフトが融合しなければ難しいと思う。ろうあの方々を含めた障がい者のためのバリアフリーについて、ハードとソフト両面から推

進するなど、「ユニバーサルデザインの街づくり」や「心のバリアフリー」を世界に発信していきたい。

Q メンタルトレーニングでストレスをためないように心掛けられたそうだが、どうすればストレスをためずに済むのか。

A 心一つで人間は大きく変わる。私は病気をきっかけに、「怒りのもと」をつくらないように努力している。日常生活にはストレスにつながる出来事がたくさんあるが、訓練を重ねることによって怒りのもとをつくらなくすることができる。それが身体の健康にも良い影響を与える。また、自分がストレスをためないことで、周囲もストレスを感じなくなり、仕事もスムーズにいくようになる。そんな好循環を生み出すことが大切だと思う。